



城

第六十三回

小倉城

～流浪の小笠原氏の振り返り～

山本 忠博

今回は福岡県北九州市の小倉城をご紹介します。この城に関係する歴史上の人物は、けっこうな数に上るので、今回は主に小笠原氏と毛利（森）氏に焦点を当てて書くことにします。

ところで、小笠原氏は、第六十一回大塔の古城ではあまり良いところのない信濃（現長野県）守護でした。さらには、戦国時代に、甲斐（現山梨県）の武田信玄に滅ぼされました。しかし、それで終わったわけではありません。

それから、上で挙げた毛利氏は、中国地方の覇者の毛利氏とは違います。もともとは森と称した、豊臣秀吉の古参の家臣の出です。

今回は、主に両氏の浮き沈みを交えて、小倉城について書き進めることにします。

まずは、小倉城の概略

小倉城は、中国地方の覇者の毛利氏が1569年に九州北部を安定化させるための重要拠点として築城したことにより始まりました。しかし、毛利氏の支配域である出雲（現島根県東部）の不安定化（第二十九回月山富田城その2を参照）に伴って、毛利氏が出雲の安定化を優先して九州北部から撤退すると、小倉城は大友氏の勢力下に入りました。その後、大友氏の衰退（第四十九回高城、第五十三回肥前肥城参照）に継いで豊臣秀吉の配下の毛利（森）氏が1587年に6万石で入城して改修に取り組みました。さらに、1602年に39万9千石の細川氏が入城し、1632年に15万石の小笠原氏が継いで幕末まで居城しました。

小笠原氏の流浪と、大坂夏の陣まで

小笠原氏は、もともとは甲斐源氏の出で、甲斐や信濃に勢力を張った名族です。鎌倉時代に阿波（現徳島県）の守護になり、室町時代には信濃の守護になりました。しかし、室町時代の後期の戦国時代には、一族が分裂し（第六十一回大塔の古城参照）、その後に一応の統一をみたものの1550年に甲斐の武田信玄によって信濃から駆逐されました。

この後、小笠原一族は各地を流浪し、同族の京都小笠原氏を頼って京都に上り、そこから越後（現新潟県）の上杉氏、織田信長、継いで会津（現福島県西部）の芦名氏を頼ることになりました。頼った先で粗略に扱われることはありませんでしたが、念願の信濃復歸の足掛かりは掴めないままでした。そんななかで、会津には行かずに信長に仕え続けた一人が、本能寺の変後に徳川家康に仕えたことから少し運が開け始めます。本能寺の変後の信濃の争奪戦の中で、徳川配下の信濃中部の大名として復歸できたのです。さらに、家康の筆頭家臣が当時の家康の敵であった豊臣秀吉に寝返った際（第十七回名胡桃城参照）に、その道連れで小笠原氏も秀吉側に寝返らせられたのですが、なんだかんだで、讃岐（現香川県）半国の大名にまでなりました。ところが、秀吉の勘気に触れる事件があって所領を没収され、結局、家康の下に戻っています。

家康の下に戻った小笠原氏は、秀吉の代に古河（現茨城県古河市）3万石、飯田（現長野県飯田市）5万石、松本（現長野県松本市）8万石と着実にステップアップしていき、父祖の地の信濃松本に復歸できたのでした。秀吉の正室は家康の孫娘（ちなみに信長の外孫でもある）なので、家康から信頼されていたことが覗えます。

1615年の大坂夏の陣では、秀吉が大坂に出陣し、その息子達は兄弟で松本城の留守を預かるはずでした。しかし、兄弟はとがめを受ける覚悟で父の後を追い、父とともに夏の陣に参加することになります。本来ならば、ただでは済まされない重大な軍律違反でしたが、家康は彼らの熱意をかって従軍を許しました。兄の方は、この前の冬の陣で失敗を犯しており、悲壮な覚悟で大坂に向かったように思われます。

毛利（森）氏の没落と、大坂夏の陣まで

森氏は、豊臣秀吉の親衛隊の出です。秀吉の九州征伐後の一揆の鎮圧に功があり、小倉6万石の領主となりました。その際に、秀吉からの指示で、或いは中国地方の毛利氏の許しを得て、森称から毛利称に改めたと言います。

昔は、“毛利”も“もり”と読んでいたようですし、今よりかなり自由に当て字をしてしまうので、“もり”との読み方さえ合っていれば、漢字はどうでも良かったのかもしれない。

さて、小倉城主の毛利氏ですが、関ヶ原の戦いでは西軍に与しました。息子の毛利勝永は関ヶ原の本戦前に活躍するも、多くの家臣を失いました。そして、小倉城の父親は、本戦での西軍の敗退を知り、東軍側の黒田官兵衛に上手く説得されて矛を収めました。しかし、毛利氏は官兵衛に騙されたと言って良く、結果として、毛利父子は小倉城を追放されることとなります。

所領を失った毛利父子は、最終的に土佐（現高知県）の山内氏に庇護されました。父子は土佐では不自由なく生活を送り、父親はこの地で没しています。息子の毛利勝永もこの地で生涯を終えるはずでしたが、大阪の陣で旧主の豊臣方から招聘されて、土佐の地を離れることになりました。

勝永は、大阪夏の陣において戦闘指揮官として抜群の牙えを見せ、その矛先には上述の小笠原父子と、さらには、彼の後に小倉城に入っていた細川氏がいたと言われています。

大阪夏の陣、小倉城絡みの三氏の遭遇

1614年の大阪冬の陣後に豊臣方の大阪城は堀を埋められて裸城にされており、1615年の大阪夏の陣では、豊臣方は野戦に討って出るより他にありませんでした。その際に毛利勝永は、真田幸村と連携して、天王寺口方面で抜群の活躍をしました。何かと幸村だけがもてはやされますが、部隊の統率者としては、勝永の方が上ではないかと思われまます。幸村による家康本陣への突撃が可能になった理由としては、勝永の快進撃が凄まじすぎて、多くの部隊が勝永に向かったからだという説もあります。

さて、勝永の家康本陣への進撃の際に、それを阻止しようとしたのが、上述の小笠原父子です。政秀は夏の陣中に家康から叱責されたことがあり、また、その子どもの兄の方は冬の陣中に失敗したことがあったため、共に死ぬ覚悟で戦ったようです。しかし勝永の勢いを止めることはできず、兄は戦死し、父の秀政も重傷を負い、ほどなくして死亡しました。弟も重傷を負いましたが、一命はとりとめています。

この後、勝永は家康本陣に迫り、最後まで組織的軍事行動をとりますが、幸村を含めた他の部隊が崩壊したため、戦線の維持が困難と判断して残兵を集めて撤退戦に移りました。これに追いつがったのが、当時の小倉城主

だった細川氏です。しかし、勝永はこれも撃退し、見事に大阪城に撤収して見せました。戦いにおいて最も難しいのは撤退戦だと言われているので、勝永の非凡さがよくわかります。勝永は、その後、豊臣秀頼の介錯を勤め、自刃して果てました。

小笠原氏の小倉城入城

大坂夏の陣で小笠原政秀とその跡継ぎは死亡していますが、弟の忠真は一命をとりとめ、彼が松本8万石を継ぐことになりました。彼は、その後、明石（現兵庫県明石市）10万石を経て、小倉15万石の藩主となりました。忠真は、家康の孫娘の子どもですし、徳川家のための戦いで父と兄を犠牲にしていたから、徳川家からは相当に信頼されていました。家康は、忠真の大坂夏の陣での戦いぶりを「わが鬼孫なり」と絶賛していたそうです。小倉城に入った彼の役目は、九州の大名の監視でした。そして、小倉城の小笠原家は幕末まで続くこととなります。

小倉城のその後

幕末の小倉城の命運は、小笠原氏が徳川家の有力な譜代大名であったことが禍しました。1866年の第二次長州征伐で矢面に立たされたのが、その有力な譜代大名の小倉藩だったからです。戦闘意欲に乏しい他藩の兵が次々と去って行く中で、小倉藩は孤立無援に近い状態で長州と戦い、その過程で、小倉城を自身で焼却したのです。それ以前に天守は焼失していましたが、これが城郭としての最後になりました。

現在の天守は1959年に復興された鉄筋コンクリート製のものです。中は資料館になっていますし、展望ゾーンからの眺めも良いです。隣接する小倉城庭園も一見の価値ありです。小倉駅や西小倉駅から歩いて行ける距離にありますので、小倉旅行、九州旅行の際に訪ねてみてはどうでしょうか。



小倉城